



# 共同通信



2008年7月11日 143(353号)

日本基督教団 西宮公会月報 〒662-0834 西宮市南昭和町10-22  
0798-67-4691 FAX 0798-63-4044、Email:koudou@gamma.ocn.ne.jp  
<http://www.koudou.jp/> 振替01170-3-4901  
ホームページアドレスが新しくなりました。

時代にふり回されるのではない 自分の人生を語ってほしい、  
あの時 心を躍らせて生きた 自分の人生を語ってほしい、  
後悔に 身をふるわせたこともある 自分の人生を語ってほしい、  
笑い 泣き 歯ぎしりをした 自分の人生を語ってほしい、  
今日 こんな決意をしたという 自分の人生を語ってほしい

## To tell the story 43 『赤毛のアンとの出会い』

夕方、スーパーで買い物をしてい  
ると、突然、携帯が鳴り、「『赤毛の  
アン』について何か書け、明日の午  
前中までに」との指令が届いた。何  
か書けといわれても・・・『赤毛の  
アン』に関しては結構マニアなので、  
時間さえあればもっと濃い内容のも  
のを書くのだが、何しろ時間がない。  
そこで、初めて『赤毛のアン』を読  
んだ頃の思い、そして、最近『赤毛  
のアン』の勉強をする機会に恵まれ  
た際に感じたことについて書いてみ  
ようと思う。

母が読書好きだったので、幼いとき  
から、近所の小さな本屋によく  
通っていた。その店主は、町内の  
子供たちがどんな本を読まねばなら

ないかということについて確固たる  
意見を持っており、「この本は、あん  
たに読ませるために取り寄せた」な  
どと勝手に注文したり、「この本を読  
むのはまだ早い」などと言って、売っ  
てくれなかったりするのだった。母  
は、10年以上も「こどものとも」の  
定期購読をやめさせてもらえなかつ  
たし、今ではすっかり有名になっ  
たが、当時は地味な存在だった『ライ  
オンと魔女』や『ゲド戦記』、出版され  
たばかりの『大草原の小さな家』シ  
リーズを教えてくれたのもこの人  
だった。エンデ、リンドグレーン、ロ  
アルド・ダール、ウェストール、ミス  
・リード、ここで買った本は今でも愛  
読しているし、子供たちにも読み継

いでいってほしいなと思う本ばかりだ。

私が『赤毛のアン』を手にしたのも、当然、その店主の勧めによるもので、初めは気が進まなかったのを覚えている。ちょっと前に、ルナールの『にんじん』をいう本を勧められて読んだのだが、その物語があまりに可哀想で、胸が痛くなるようなお話だったので、「赤毛」というだけで、その嫌な思いが蘇ってくるような気がしたからだ。

しかし、『赤毛のアン』にはたちまち魅了されてしまった。当時、私は、アンが物語クラブを作ったように、想像の世界にひたり、自分で物語を創作するという楽しみを持っていた。もちろん、思い出すと赤面してしまうような内容の代物なのだが、唯一の読者である6歳年下の妹には毎回大うけで、「私って天才かも」なんて思っていた。(その後、兄に見つかって大爆笑され、筆を折ることになるのだが)そういう私にとって、アンはごく身近な存在に思えた。

それ以来、何回『赤毛のアン』を読んできたのだろう。わが家の『赤毛のアン』は、あんまり何度も繰り返し読むので、すぐに傷んでしまう。今現在、私の家にあるのは、初代から数えて7代目くらいの本になるだろう。

店主が、『にんじん』と『赤毛のアン』を連続して読ませたことに理由があったのか、それともただの偶然

だったのかについては聞いたことがなかったが、この2つの物語は、私の中では、いつも対照をなしてワンセットで存在し続けており、切り離して考えることができない。

『にんじん』については、タイトルは知っていても、内容を詳しく知っている人は、意外に少ないのではないかと思う。主人公は、赤毛でそばかすだらけのみっともない男の子である。裕福で社会的地位もある実の両親、兄、姉と暮している。主人公の母親は、兄や姉のことはかわいがっているが、主人公のことは、本名ではなく『にんじん』という侮蔑的なあだ名で呼び、疎んじている。父親はそのことについては、まったくの無関心である。彼は、母親のひどい仕打ちのためか、ひねくれて、ずるくて残酷な性格になってしまっている。にんじんは、それでも、なんとか母親に気に入られよう、愛されようと頑張るのだが、とうとう母親の愛情を得ることは出来なかった。そして、最後に彼は、自分を愛さない母親を自分も愛さないという結論に至り、自立することで母親との関係から自由になろうとする。そういう物語だったと思う。子供のときに何回か読んだきりで、手元においてないので、細かいことは覚えていないし、思い違いもあるかもしれないが、とにかくにんじんのことが痛々しくて、読んだ後は暗い気持ちになった。

『赤毛のアン』の主人公であるアンも、同じく赤毛でそばかすだらけのみっともない女の子である。彼女は貧しい孤児で、手違いにより、グリーンゲイブルズのクスパート兄妹の元にやってくる。兄のマシューがアンを気に入ってしまったので、妹のマリラは、義務感からアンをしづしづ育てはじめるのだが、純粋で真っ直ぐな性格のアンは、やがて、マリラからも深く愛されるようになる。孤児として誰からも愛されずに育ったわりには、いい子過ぎるし、上品で美人で頭もいいなんてちょっと都合よすぎるかもと、設定に無理を感じることもあるが、そこはフィクションとして、純粋にお話を楽しむことにしている。

私は、子供を持つてからは、2つの物語を子供の立場ではなく、母親の立場からみるようになった。わが子を虐待することで精神のバランスをとろうとする、にんじんの母親の心の中に潜む闇や葛藤を、少しは理解できるようになった。そして、また、マリラやマシューのように、愛する対象を持つことができたという喜び、愛することの幸せは、愛される幸せよりも大きいのだということ、私は子供たちとの生活から日々教えてもらっている。

上の娘たちはアンと同じ年頃になり、『赤毛のアン』を読み始めた。「アンのお話に出てくるよね」なんてい

う会話も親娘でするようになったが、『にんじん』はまだ読ませていない。私がこの物語を読んだ頃と違い、今は、にんじんのような境遇の子供たちは決して珍しい存在でないからだ。実の親から虐待を受け、疎まれて、命を落とす子供たちさえいる。ニュースの中の出来事だけではなく、悲しいことに、現実のクラスメートの中にもにんじんは存在しているのだ。実の子を愛せないにんじんの母親と、他人のアンをわが子とをして愛するマリラ。あの店主は、2人の赤毛の子供を通して、この2つの母性を感じて欲しかったのではないかなと、最近思うようになった。幼いころは、両極にある別々の存在としてとらえていた2人の母親だったが、今は、どちらも1人の母親の中に、同時に存在している母性なのだと感じていい。私自身の中にも2人がいる。そして、私は、どちらの母も受け入れてあげたいと思っている。

(高島 紀子)

個本だけを考えると「間島」は悪いけれど生きものという存在として見ると間島は新しいものを生むのです。でも間島えるようになってきているかという基本的には間島えなようになってきているところかおもしろい。そこが生きもの魅力をつくっているんじゃないかな？

(中村 桂子)

「大ぜいの群衆がイエスについてきた」「大ぜいの群衆が自分のほうに集まってくるのを見て」(ヨハネ福音書6章2節、5節)など、イエスは「病人たちになさっていたしるしを見たから」ということで、群衆に囲まれ群衆に追っかけられました。この場合のイエスが病人たちに“なされていた“しるし”は、例えば“ベテスダの池の奇跡”のようにして起こるいやしと違ったものとして理解されていました。「エルサレムにある羊の門のそばに、ヘブル語でベテスダと呼ばれる池があった」「その廊の中には、病人、盲人、足なえ、やせ衰えた者などが、大ぜいからだを横たえていた」「時々、主の御使がこの池に下りてきて水を動かすことがあるが、水が動いた時真っ先にはいる者は、どんな病気にかかっているか聞いてもらって、癒された。」なのですが、その時間を待っていた「38年の間、病気で悩んでいる人」を、イエスは自分のやり方でいやしてしまいます(ヨハネ福音書5章2

~9節)。そのいやし「病人たちになさっていたしるし」のことが評判になって、群衆がイエスのもとに殺到することになったのが、6章2節、5節などの記述です。

そうして殺到することになった群衆のことで、弟子の1人ピリポに「どこからパンを買ってきて、この人々に食べさせようか」と問います。大ぜいの群衆(6章10節では「男の数は5000人ほど」とある)の為のパンを用意することが不可能であることを承知で「これはピリポをためそうとして言われたのであって、ご自分ではしようとするのを、よくご承知であった」と、言ってしまったりします。なのに、弟子の1人アンデレが持っていた「大麦のパン5つと、さかな2匹」で、群衆が“じゅうぶんに食べる”ということをやささとやってしまいます。

イエスのもとに殺到した“大ぜいの群衆”をまのあたりにしてピリポもアンデレも彼らを食べさせるにあたっての現実的な“計算”をし

す。こうして計算することが間違っている訳ではありません。しかし、計算の結果、ピリポやアンデレは大ぜいの群衆の為のパンを用意することは不可能という結論に達します。

という結論になって、それしかありえないはずなのに、イエスにはわざわざばかりのパンとさかなで「人々がじゅうぶんに食べる」ということをします。この場合のイエスの奇跡は、ベテスダの池で起こることが期待されていた奇跡と同じではありません。

奇跡を競っているということではないようですが、現に行なわれ、期待されていたこととに“横やり”を入れるようにしているのですから、別の主張があったはずですが、ベテスダの池の奇跡は、“時々、主の御使いがこの池に降りてきて水を動かす”時の、しかも“水が動いた時に真っ先”を競わなくてはなりません。イエスは、ベテスダの池で見かけた人のことでは「なおりたいのか」と聞いて、ほぼ無条件でその人をいやします。パンの奇跡の場合“大ぜいの群衆”がイエスにパンを望んだ訳ではありません。“病人たちになさっていたしるし”を見ていて、そのことでの期待でイエスのもとに集ってきた人たちです。この人たちが期待したのは“病人になさっていたしるし”と同じしるしが、自分たちにも起こることです。ヨハネ

福音書は、その時の大ぜいの群衆にその期待のことでは直接答えないで、「どこからパンを買ってきて、この人々に食べさせようか」と、別の問題にしてしまいます。そうなのですが、ベテスダの池の奇跡のイエスのいやしの場合にしても、何かをすり替えているわけではありません。待ち続けて、その機会にめぐり合えばいやされるということではなく、その人に出会ってその人の意思に耳を傾けて、それに答えるということでしたら、真正面に向かい合っているのです。「病人たちになさっていたしるしを見て」同じ事を期待した人たちに、すぐそのまま答えてはいませんが、そこに集まった人たちが生きてそこにいる人たちであることから目をそらしたりはしません。人が生きる為に欠くことのできないこととしての“食べる”こと、パンとさかなを「望むだけ分け与え」「じゅうぶんに食べる」という何にも代え難い切実な課題に答えてはいるのです。

(菅澤 邦明)

## 「畑が大好きな子どもたち」

畑が大好きな子どもたち。行くたびに変化があり発見があって、いつも楽しませてくれます。赤くておいしいいちごをたくさん味わうことができた5月。もうそろそろいちごも終わりになってきたかな～？という6月の初め頃、畑へとお散歩に行ったぽっぽぐみの子どもたちです。畑と言えば“いちご畑！”で、いつでも真っ赤ないちごがいっぱいある！と信じている子どもたち、「きょうもいちごできてるかな～??」と、畑に近づいてくるとワクワクしながら言っていました。ところが・・・先に畑に着いていた他のぽっぽぐみの子どもたちが大騒ぎしています！「いちごがないのー！！」と走って言いに来てくれました。

「えーっ！？」って驚いて、葉っぱの下やあちこちを探してみたのですが、赤いイチゴはほとんど見つかりませんでした。「だれかがたべちゃったのかな～？」と残念そうな子どもたち。こうして最後の“いちご畑”をみんなで見守ったのでした。そして次の日には、園芸サークルの方や、たくさんのお父さん、お母さん方の手によって、畑作業が行われました。“いちご畑”から今度は“さつまいも畑”に変わるため、畑の畝をきれいに耕して下さいました。次の週、全クラスで畑へと向かいまし

た。この日は、さつまいもの苗を植えるのです。きれいに耕された畝を見て、「あれ～？いちごがない！」「きれいになってる～！」と驚いていた子どもたちでした。園長先生や園芸サークルのお母さん達が、畝に苗を植える筋を入れてくださり、さあ、1本ずつ苗を持って植えていきます。“苗の植え方”を、園長先生が教えてくれました。苗を寝かせて置いて、茎のところには土をかぶせて、はっぱのところには土はかぶせない。土は、ポンポン！って叩かず、布団をかぶせるようにそっとかける。ということ。上手に置いて、そっと土をかぶせていた子どもたちです。何もなかった畝が、あっという間に緑の“さつまいも畑”に変身しました。夏が来て秋が来て、さつまいもがたくさんできる日をみんな楽しみにしています。

畑にはいろんな野菜が育てられています。玉ねぎ、じゃがいも、にんじん、なすび、緑の野菜などもたくさんです。自分たちで植えて収穫した玉ねぎやじゃがいもを使って、お昼ごはんにカレーライスを作って食べました。野菜を洗ったり切ったりして、みんなで作ったカレー、特別においしい味がしました。お友達みんなで食べる畑の野菜はいつも特別！いっぱい食べられる魔法の野菜なのです。

ひまわりもぐんぐんと成長を続け

ています。子どもたちと同じぐらい  
とっていたひまわりが、いつの間  
にか大人の高さを超え、まだまだ大  
きくなっています。ひまわりのトン  
ネルをくぐったり、背くらべをした  
りと楽しんでいるのです。いろんな

発見をさせてくれる畑、これからも  
いっぱい楽しんでいきたいです。

暑さが厳しくなっています。  
少しでも涼しい一日を過ごせるよう  
に、子どもたちとの日々を楽しんで  
いきたいと思います。

( 近山 佳奈 )

### 聖書研究祈祷会

毎月第1、第3水曜日午後7時から、場所は西宮公会堂集会室です。8  
月は休会、9月は3日、17日になります。

聖書はキリスト教の神のことを、人の言葉で語ってみようとした試みです。

そんな試みで残された聖書言葉は、当然あれこれ難解だったり、神の前に立つこと  
を拒む人というものに呆れ返ったり、生々しかったりしますが、“神の前に立つ一人とし  
て謙虚に生きる”ことと、その意味を、言葉を尽くして語ろうとします。じっくりと腰  
をすえて聖書を読むのが、西宮公会堂の聖書研究祈祷会です。

## グアテマラ便り

日本は梅雨の真っ只中でしょうね。こちらも雨季なので、午後からはざあ～と降ります。そして、20度まで上がらない、肌寒さです。

グアテマラに来て、そろそろ6ヶ月。こちらのビザは90日有効で1度は延長できるので、180日は滞在できるのですが、それ以上になると一旦、海外に行かなくてはなりません。忙しいこともあって、お隣のメキシコシティへ、前回訪れたときに、お金が足りずに買えなかった画集を買いに行くことにしました。そして、もうひとつ、メキシコの建築家、ルイス・バラガンという人の建てた修道院の見学です。

トゥラルパンという郊外、少し気難しそうなシスターに迎えられました。そして彼女に案内され、一步、礼拝堂への扉にさしかかった途端、うわぁ～と涙が出てきてしまって、自分でも驚きました。「ごめんなさい・・・」と言いながらも止まらなくて恥ずかしい・・・シスターもちよっとびっくりしたみたいです。

ルイス・バラガンは、光の入り方が美しい建築をします。建築は確かにすばらしいのです。でもそれ以上にそこに漂う空気が美しいと言う感じでしょうか??建物全体を見学させていただいた後、そのシスターとしばらくお話をしました。彼女は50

年前にここに入ったとのことでした。この建築物が作られていたころです。建築家も深い信仰があり、それが、そういう空間を作り出すのかもしれない。ありきたりな言い方ですが、心が洗われるってこういうこと?な気持ちです。なんだか穏やかかつ、力強い話を聞かせていただき、「最後にもう一度少しなら、っていいですよ」と言っていて、少しだけお祈りをさせてもらいました。

トゥラルパンに行って、もう今回の旅は十分だと思いつつ、もう一人、フィリップ・キャンデラという建築家の教会もいくつか巡ることに・・・街の教会ばかりです。それぞれの街の持つ雰囲気合った建築物でした。ちょうど週末でミサに、人々が訪れます。しばらく端っこに座らせていただきつつ、眺めていると心地よい時間が過ぎます。修道院の張り詰めた空気ではない、人々の温かみのある空間でした。

共同教会でも、しばらく礼拝堂に座らせていただいたことがありました。やはり温かく、静かな空間でした。心地よく、確か気づいたらうたた寝しかけていた気がします。建築物はその建築、設計に力は必要だけれども、やはり中に生きる人々があってこそなんだなぁ。

(横山 佳代子)



## 2008年7月 あんなこと こんなこと...

- ・ 7月 1日(火) 早天祈祷会
- ・ 7月 5日(土) ほしまつり
- ・ 7月 8日(火) ゆっくりと聖書を読んでみませんか
- ・ 7月 12日(土) 教会学校教師会
- ・ 7月 13日(日) 特別礼拝
- ・ 7月 19日(土) 幼稚園1学期終了・ブックスタート
- ・ 7月 21日(月)～23日(水) 公同子ども能勢キャンプ
- ・ 7月 30日(水)～8月3日(日) 公同子ども沖縄キャンプ
- ・ 8月 18日(月)～20日(水) 幼稚園教師研修会

### にしきた商店街...

- ・ 7月 3日(木) にしきた街舞台実行委員会
- ・ 7月 6日(日) 津門川川掃除
- ・ 7月 8日(火) 南昭和町自治会・七夕たそがれコンサート
- ・ 7月 9日(水) 商店街役員会
- ・ 7月 13日(日) にしきたLALALAミュージシャンコンテスト にしきた予選
- ・ 7月 16日(水) “もっとしりたい赤毛のアン”

### アートガレージ

- ・ 毎週火～金曜日 9時～17時 毎週土曜日 15時～17時 開室日
- ・ 7月 1日(火)、15日 丹波野菜市
- ・ 7月 1日(火)～6日(日) “踊って、跳んで、アン・ドウ・トワ” 写真展
- ・ 7月 12日(土) アートガレージ運営委員会

### 関西神学塾

- ・ 7月 12日(土) 午後7時～9時 松村重雄 宣教学特別講義
- ・ 8月 21日(木)～22日(金) 関西神学塾・「教会と聖書」共催夏期合宿

### 日本基督教団西宮公会集會案内

早天祈祷会	毎月1日午前6時30分から	於：西宮公会集會室
教会学校	毎週日曜日午前9時から	於：西宮公会禮拜堂
聖日礼拝	毎週日曜日午前10時45分から	於：西宮公会禮拜堂
聖書研究祈祷会	毎月第1・3水曜日午後7時から	於：西宮北口西伝道所
読書会	毎月第2・4水曜日午後7時から	於：西宮北口西伝道所
ゆっくり聖書を読む会	毎月第2火曜日午前10時から	於：西宮公会集會室



## 教会学校から

### 《6月の活動報告》

6月1日(日)

わが街クリーン大作戦

6月8日(日)

花の日合同礼拝

6月15日(日)

“家族で一緒に集まろう”

6月22日(日)

グループ作り“IDカードを作ろう”

6月29日(日)

ブーメランを作ろう

### 《7月の活動予定》

7月6日(日)

かき氷を食べる!

7月13日(日)

プール遊び

7月20日(日)

キャンプ・ソングを歌おう!

7月21日(月)～23日(水)

共同子ども能勢キャンプ

7月30日(水)～8月3日(日)

共同子ども沖縄キャンプ

# 大切な贈り物・津門川 7 1

## “津門川を見つめて”

私が生まれ育ったのは、栃木県那須郡の田舎町。実家の近くにはわりと大きく、とても綺麗な川が流れていました。夏になると、友達と毎日川遊びをした事、川の流れと蛙の声を聞きながら眠りについた事を思い出します。大学、社会人生活は東京で自然に触れない毎日を送り、結婚と同時に西宮に来て、また“川”を身近に感じる生活になったのです。

長女が生まれ、ベビーカーを押して津門川沿いを散歩することからスタート。縁があって共同幼稚園にお世話になる様になってからは、津門川を眺めながら登園しました。その後伏原町に引っ越してからも、現在次女を連れて、以前とは逆の方面から津門川を眺め登園する毎日。朝の忙しい時間、猛スピードで自転車をこぐ私の後ろで『今日は鴨おるかな？』『亀もおんねんで、あの辺』『あっ、ゴミあった。アカンのにー』と次々に出てくる娘の言葉についついスピードを落として川を眺めてしまうのです。

その津門川、春には鯉のぼり、夏には笹飾り、冬にはイルミネーションと、四季折々のとても賑やかな顔を

持っています。園の関係者だけではなく、毎年それらを楽しみに待つ住人も多くいるのではないのでしょうか。また、園の前にズラリと並ぶプランターの数々。これは順子先生がとても大切に管理されているプランターで、園芸サークルに所属する私は、花の植え替えや手入れのお手伝いもさせて頂いています。『次はどんな花が咲くのだろう？』等と、川沿いの花の景色も沢山の人の楽しんでもらえたらなあと思います。

色々と思い入れがある津門川ですが、地域の方々の力で守られているとの事。川掃除は知ってはいたものの、なかなか参加できずにいました。しかし、長女が教会学校に入ったのをきっかけに、思い切って参加する事にしましたのです。“自分達の住む西北の街を、そこに流れる津門川を綺麗にしたい”ただそれだけの思いです。

実際に川掃除をして、ゴミの多さにガッカリ。道路にはタバコの吸殻も沢山投げ捨てられていました。何の迷いもなく捨てていってしまうのでしょうか??? 掌いっぱい吸殻を集めた娘達を見て、マナーを守らない大人がいる現実を悲しく思いま

した。と同時に、川掃除を通して、この活動の大切さを娘達も何か感じ取ってくれたらなぁと思いました。

私にとって“川”のある生活は、やっぱりいいものです。川の音を聞いたり、甲羅干しする亀を見ると一

息つけるし、季節を感じさせてくれるこの津門川が好きです。自分達の街です。川です。小さな力ではあるけれど、綺麗になる為のお手伝いを続けていくつもりです。

(橋本 淳子)

## つとがわ 編集後記

父(富山県、氷見)のことで“呼び出し”の電話があり、翌日(7月2日)大急ぎで世話になっている施設を訪ねました。声をかけても、ゆすっても、合図をしても閉じた目を開けてくれませんでした。やっと開けた目で“息子”であることが解るようでしたが、半月ほど前に訪ねた時のように、一瞬表情が変わる、という様子ではありませんでした。食べやすいので、もっぱら愛用している“チューブ・ゼリー”も、持つ力がずいぶん弱っているようでした。そんな様子のももあつての“呼び出し”だったので、傍らにいたことができたのはたった2時間でした。

「季刊・福祉労働119号、2008年夏号」の特集は“介護労働の負担”です。介護保険制度のこと、高齢者の施設の最前線で働く人たちの現実のことが、赤裸々に報告されています。父(宝塚)の世話になっている施設の担当者がめまぐるしく変わってしまう様子を少なからず怪訝に思ったりしていましたが、介護者の側からの現実を少しは知ることになりました。

(K)

とってもいいお天気に恵まれたほしまつりやっぴり色んな再会があった1日。私の妹が手伝いに来ていたのですが、年少・年長の時の担任の先生との再会 これをとっても楽しみにきていた妹です。やっぴりとっても嬉しかったようで～再会の様子を見たり話を聞いて、公同の素敵などころを改めて感じる事ができたのでした 色んなところでつながっていて素敵な出会い、再会があることに感謝します。

(N)

子どもたちとおさんぽしていると、わいわいがやがや言っている声に混ざってセミの声が!

真夏にセミの大合唱はあんまり好きではないけ

れど～、今年イチバンが聞けて嬉しかったです。しかもバッチリ セミの姿も見つけました。

暑がりの私ですが夏は大好き 夏本番もすぐそこ!ですね。

(Y)

7月に入って、今年はセミの鳴き声はまだ聞こえないなぁと思っていました。なんだか今年は涼しいようで、だからかなぁと思っていたら...ジューっと幼稚園の園庭のけやきから。ああ～いよいよです 入道雲ももくもく。まだ梅雨の明けきらない日が続いていますが空が夏色で嬉しくなります。今年も夏を目一杯満喫できますように...。暑い夏に心が躍ります

(I)

「世の中狭いな!現象」と昔ある人が口にしていた。出かけると、誰かとしゃべると何かつながっていることがあるというもの。確かに!

先日初めてしゃべった人たちと友人を通して実は知り合っていたこと。たまたま口にした名前が相手の知り合いであったことに驚いた。人って限りなくずっとつながっているのかもしれない(なあって!)

ところで、沖縄からの発信はちょっとお休み。就職の決まった舞ちゃんは原稿の事忘れたかなー。でも新しく始まった、グアテマラという知らない土地からの便りという楽しみが加わりました。

(J)